

# 問われる広島大学の見識

工学部  
回路・システム工学講座

吉田典可

## はじめに

本学では、先に示された将来構想検討委員会答申「二十一世紀へ向けての広島大学のあり方」(平成元年四月)を踏まえ、教育研究整備基本計画検討特別委員会答申中の「大学院の教育研究の整備充実について」(平成四年三月)が示されている。

現在検討中の大学院部局化は、これら大局的視点に立った検討結果を基礎にして、かつ最近の社会情勢の変化や国の文政行政の転換を考慮した上で、先導的視点に立ったものであることが望まれる。

本稿では、大学院重点化大学への再編整備の必要性を私見として述べたい。

## なぜ大学院部局化が必要か

明治維新以降の我が国では、欧米先進国に「追いつけ、追い越せ」を目標にして現代まで推移し、経済的には一応の水準に達したかのように評価されている。しかし、他方では科学技術分野のうち、特に基礎的分野での我が国の貢献が少ないことから、貿易摩擦な

どをとおして「ただ乗り」の批判を受けるに至っている。この論考を深める紙幅を許されないが、今後においては、我が国があらゆる分野にわたって、先進的な成果を、地球規模で先導的に普遍していく必要があることには異論がない。

特に、科学技術分野については、国も「科学技術振興政策大綱」を定めるなど、ようやく欧米に並び得る水準への施策展開を手掛けたところである。科学技術の振興において大学が担うべき役割について改めて論及する必要があるだろう。国としては、より深奥な学術的成果と、より高い技術水準を醸成、維持する使命をどこに、どのようなに託すべきなのか課題である。科学研究費補助金の重点配分方策などその方向性と実践例を見ることができ

る。学術研究、特に科学技術分野での基礎的研究開発を担う大学が選ぶべき努力目標も、自ら明らかである。現代に限らず、大学は常に社会とともに在りながら、かつ、将来を見通した見識で、教育と研究に取り組まねばならない。時あたかも、国土形成は一極集中型から多極分散型へとその理念を移しつ

つある。「学識、技術に国境はない」と言われながらも、なおかつ文明文化の所産としてのそれは、地域なり時代としての特色を失わないものが少なくない。すなわち、これらの活動への関わり

では主体的な取り組みを基礎にしながら、究極にはより広い普遍性がその成果として問われることを意味する。また、個々の人間やその組織によって知的所産としての真理の探求、蓄積や技術の創造、展開が求められるのと同様に、その価値ある学識、技術の成果は次の世代への伝承も必然要請されよう。

ここに、大学に託された研究と教育への課題が存在する。本義としては、探索や創造とその蓄積、展開を主として担う研究活動と、次の世代への知的所産の伝承を担う教育活動の違いを改めて認識する必要がある。もちろん、幾つかの世代が混在して形成される教育の場では、教育者と学習者との相克のないしは協調的活動から新しい建設的な研究課題が産み出されることも心得ておかなければならない。

本学が少なくとも地域型センター・オブ・エクセレンスの中核的存在となり得るかどうかは、国際的に通用する水準の研究活動が実践できるかどうかにかかっている。この課題に対応して本学が採るべき選択は、いうまでもなく、研究活動に比重を大きくした大学院重点化、すなわち、大学院各研究科の部局化であると信じる。機を逸することなく、新たな発想による早急

な整備が望まれるところである。

## どんな目標を掲げるのか

新しい特色ある大学院重点化大学では、新たな学問的ないし社会的な要請に応えるべく、高度の専門教育と学術研究において、創造能力と批判精神の涵養に努め、大学院自らがたゆまぬ自己点検によって活性化に取り組むことが必要である。

これにより、各専門分野での基礎的研究の深化と応用研究の進展を期するとともに、境界領域や学際領域での先進的研究の開拓を含めて諸研究の総合化を図ることにより、研究拠点としての充実が期待される。

また、従来実施してきた研究者や高度の専門職業人の養成のための大学院教育について刷新充実を図るとともに、特に、国際的な貢献、ならびに生涯を通じての学習研鑽への有効な支援が顕著となるよう、高度の教育研究を強力に推進することが求められる。

## プロフィール

(よしだ・のりよし)



◆専門は電子回路とそのシステムに関する

理論と応用開発

◆評議員、工学部長、学長補佐を歴任